
星のカービィ ゼロの復讐劇III -大迷宮-

零物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ ゼロの復讐劇III - 大迷宮 -

【Nコード】

N8143G

【作者名】

零物質

【あらすじ】

鏡の国の王「ライトマインド」が突然ダーク化して「ダークマインド」へと変貌し、瞬く間に鏡の世界を混沌の渦に巻き込んでしまった。そんななかのんびり過ごしているカービィ達。毎日ゲーム三昧の彼らに、今再び脅威なる強敵が立ちはだかる・・・!!「ゼロ復シリーズ」第3弾ついに始動!!

4 部作Ⅰ 「鏡の国の大異変!？」

カービィとシャドーカービィのあの奇跡からもう3ヶ月が過ぎようとしていた……。

彼らはあきれるほど平和なププランドであきれるほど平和のひと時を過ごしまくっていた……。

あんな危機が迫ろうとしているのに……。

「星のカービィ ゼロの復讐劇ⅠⅠⅠ - 大迷宮 - 」

ププランドのはるかにはるか遠い空の彼方に、鏡の国というとても美しい国があった。

そこには、シャドーカービィというカービィと対等の関係にあるカービィのそっくりさんがいた。

ある日のこと、ひまでひまで仕方なかったシャドーカービィは王の間へと向かおうとした。

シャドーカービィ「あゝヒマヒマヒマヒマヒマ……!」

ダークメタナイト「どうした、シャドー?」

シャドーカービィ「ヒマなんだよ、ヒマヒマ……! だから今から軽く王様に会いに行くんだよ……!」

ダークメタナイト「はあ……。おまえは王様を何だと思ってる?」

シャドーカービィ「王様と僕は親友なの……! 関係ないでしょ……!」

ダークメタナイト「たわけが……! 王様は王様だ……! 少しは敬う気持ち……!」

シャドーカービィ「王様は僕のと……も……だ……ち……な……の……!……!」
ダークメタナイト「はあ……。もう勝手にしとけ。」

ダークメタナイトはそのままシャドーカービィの反対方向へと進み、一方のシャドーカービィは王の間へと向かう。

シャドーカービィ「よし、とりあえずたどり着いたな。んじゃ・
・
ギイイイ・・・

シャドーカービィは鏡でできた重いドアを静かにあける。
その先に、誰かが頭を抱えて暴れているのが目に見えた。
そう——ライトマインドである——！！

ライトマインド「ああ・・ううあああ——っ！！」
シャドーカービィ「お、王様——！！」

シャドーカービィはライトマインドへと走るが、オーラの力で跳ねのけられる。

ライトマインド「うああ——っ！！ゼロオオオ——っ！！」
バァーンッ——！！
シャドーカービィ「うわあ——っ！！」

シャドーカービィはそのままふつとんで鏡の壁に激突する。
シャドーカービィはライトマインドを見つめる。

シャドーカービィ「王様・・・どうして・・・！？」

シャドーカービィがつぶやいたその瞬間、ライトマインドのオーラが急激に激しくなり、そのオーラが完全にライトマインドを包み込んだ——！！

その後、オーラから出てきたその姿は・・・。

ダークマインド「あああ・・・。」

シャドーカービィ「お、王様・・・！？その姿は・・・！？」
ダークマインド「ごああっ！！」

ダークンマインドとなり果てた元ライトマインドはそのまま天井の鏡を突き抜け、外へと飛び出した！！

バリイイーンッ！！！！

シャドーカービィ「おああっ！！」

シャドーカービィの体に無数のガラスが突き刺さり、そのまま倒れこむ。

シャドーカービィ「お・・・王・・・様・・・ああ・・・。」

シャドーカービィはそのまま気を失ってしまった。

そのシャドーカービィと天井をはさんで真上にいるダークマインドは、そのどこかへと飛んで行ってしまった・・・。

いったいなぜダークマインドはくるってしまったのだろうか・・・！？

そして、シャドーカービィの運命は・・・！！

ついに、鏡の世界での壮絶な物語が幕を開く・・・！！

そんな出来事が起きているのにもかかわらず、カービィ達は太陽の下でのんびりと、のんびりとすごしていた。

そんなひと時を過ごしているカービィは今何をしているのでしょうか？

チュン、チュンチュン

カービィ「よし、いくぜい!!」

パラウド「負けないツスよ!!ふうっ!!」

デデデ「2人ともガンバ……。はあ……。」

カービィ達は、あの有名な「マ。オカート」をやっていた。

カービィ達のレースバトルはますます過激化するばかり。

それぞれのレースポイントは54ポイントと54ポイント。まさに
互角の戦い!!

パラウド「ぐう……!!」

カービィ「うおおっ……!!」

2人がすごく熱中しているそのとき、画面が突然真黒になった!!

ブチッ

カービィ「え……!?!」

パラウド「あああんっ!?!な、なんなんスカ!?!」

デデデ「うるせえよ!!」

カービィ達が振り向いたその先には、電源コードを片手に持っていたデデデの姿だった!!

カービィ「おいおい!!なにやってくれてんだよ!!」

デデデ「大王にそんな態度はないZOY!!」

パラウド「大王様あ……!!いくら大王様でもそれは許せないツスよ
お……!!」

カービィとパラウドは怒りにおぼれまくっている様子。

しかしデデデは冷静に話す。

デデデ「だいたいさあ、朝の5時から5時間も6時間もやるなんて異常だぞ？もうすぐ昼になるし。」

カービィ「何時間やったって関係ないでしょ！？」

そう言い争っていると、昼の鐘が・・・

カーンカーン

パラワド「あ、もう昼ツスよ。」

デデデ「おら、さっさと昼食をとるぞ。」

カービィ「はあ・・・。」

そのままランチルームへと行こうとしたその時、窓の向こうから大量の鏡のかけらが降り注いだ！！

ババババアアーツ！！！！

カービィ「わあっ！！！」

カービィ達3人は全身に無数に刺さり、そのまま地面にぶっ倒れた。

バタンツ

カービィ「ぐう・・・ううう・・・。」

デデデ「いつててて・・・ったく、なんだこれは・・・！？」

パラワド「すごく痛いツスウ・・・。」

彼らは痛みには耐えながら鏡のかけらを引き抜く。

デデデ「なんだよ、これは！？」

カービィ「言われても・・・知らないよっ！！！」

パラワード「ちよつと外を見てみるッス。」

そういうと、パラワードは窓の外へと体を乗り出す。

パラワードはその光景を見て息が詰まった。

パラワードが目の当たりにしたその光景とは、天空から街全体へとど
んどん降り注いでいく鏡のかけら群であった。

パラワードはいそいでデデデに知らせる。

パラワード「だ、大王様ああゝ!!」

デデデ「どうした!! なんのようだ!!」

パラワード「そ、外を見てくださいッス!! ほら!!」

デデデ「どれZOY??」

デデデも窓の外へと体を乗り出す。

デデデもはつとした表情になった。

デデデ「な・・・なんZOY、あれは!？」

パラワード「僕のも全く何のことか・・・。」

カービィ「はいはいはい、なにがどうしたって、ええ?」

カービィも無理やり2人を押しのけて窓の外を見る。

カービィもびつくりの様子。

カービィはすぐに後ろに向き、デデデらに話しかける。

カービィ「・・・異常気象でしょ、これ?」

デデデ「あれが「気象」なはずねえだろうが!! ってか何であんな
のが降ってくるんだよ!!」

カービィ「あゝ!! とにかく外に出るよ!!」

パラワード「そんなことがあるうかと思ってたッス!! はい、みんな
に鎧ッス!!」

カービィ「よ、鎧・・・！？」

そう言われて受け取ったその鎧は、各サイズに合わせて作られている銀色の鎧であった。

カービィ達は早速着装する。

カービィ「・・・やっぱり鎧だから重いなあ・・・。」

デデデ「重さなんて関係ないだろ？ってかなんでこんなの用意してたんだ？都合良すぎる・・・。」

パラウド「そんなの気にしなくてもいいじゃないツスカ。んじゃ、レッツゴー！！」

カービィ達は急いで階段を下っていく・・・。

そして5分後――

パラウド「はあ・・・はあ・・・やっと玄関にこれた・・・。」

カービィ「ったく、なんでこの城はこんなに複雑なんだ！！！」

デデデ「俺様に言っくな！！そんなのより、さつさと外に出るぞ！！」

カービィ「はあ・・・。」

カービィ達はそのまま重たい玄関のドアを、木のきしみとともに開け、ゆっくりと前へ前へと歩く。

一歩外へと出た瞬間、鎧に大量にガンガンとぶつかる振動と音が響いた。

ガガガガアアーツ

カービィ「うおおっ！！」

デデデ「かけらの量すげえなあ・・・。」

あのかけらは雨のように降り注いでいた。

いや、雨どころでは済まされないかもしれない。暴風雨というべきだろうか。

とにかくものすごい勢いでもものすごい量が降ってきているのは事実。そんなこんなでじたばたしているうちに、パラウドが空を見る。

パラウド「はあ……。ううん？……！？だ、大王様！！空を見てくださいッス！！」

デデデ「ああん？何の話だよ……。……なあっ！？」

デデデが見たその空の光景は、混沌の空気漂うブラックホール状の紫の暗黒空間であった。

青い稲妻がとどろき叫ぶ。空間はどんどん広がる。

彼らはその空間の中心をこらして見ると、そこにはなんとあの鏡の国のゲートがあった！！

カービィもそれ気づき、そのあとにデデデらを見つめる。

カービィ「おい、あれは確か……。」

デデデ「鏡の国のゲートだ。あんなところからかけらが降り注いでいるのか……。」

パラウド「大王様、あの混沌の空気を感じるあの渦はなんスか？」
デデデ「わからん。鏡の国は平和な世界のはずなのだが……。なぜなんだ？」

カービィ「わかんない。でもとにかく調べてみるしかないね！！」

そういうとカービィはいつもの口笛でワープスターを呼び寄せた。

ピュウウッ！！

シュウウウーンッ

カービィ「よし！！みんな！！さっそくこのワープスターに乗って鏡の国へと行こうよ！！」

デデデ「決まってるだろうが!!行くっきゃねえZOY!!」
パラワド「んじゃ、さっそくワープスターに乗って、鏡の国へ……!!」

カービィ「ああ!!んじゃ、早速いつてやるぞおおーっ!!」

カービィ達3人はワープスターにサッと乗り込み、空に高々とそびえている「鏡の国へと目指す。

いったい何があったのだろうか――

そんな思いを抱きながらも鏡の国へと超特急で目指す……。

カービィ達はようやく鏡の国の手前までやってきた。
カービィ達はいったんそこで立ち止まる。

カービィ「……なんだ、この威圧感は……?」

パラワド「いつもの鏡の国じゃないッスよぉ……。しっここもれそうッスよ。」

デデデ「ここまで来て弱音はくんじゃねえよ!!ウ。コ漏らしたるか!?!」

パラワド「いや、消化基本早いんでそんなことは……」

カービィ「何喧嘩してんだ?」

カービィの一言で喧嘩が一気に収まる。

デデデ「はぁ……。それにしても、いったいなにが……。」

カービィ「とにかくこのゲートをぐりぬけよう!!何が起こっているのかを知るためにもね!!」

デデデ「よぉし……。行くぞ!!」

パラワド「ウギヤアアアッ!!!!怖いッスウウウウッ!!!!」

彼らはその合図とともに鏡の国のゲートを通りくぐっていくのであった……。

- 鏡の国 -

カービィ達は鏡の国の領域内へと入った。

その世界は、360度見渡しても鏡の世界。

しかし、鏡といえども、普通の透明な鏡だけではない。

赤い鏡、青い鏡、さらにはイルミネーションのように光る鏡など、多種様々だ。

彼らはそんな世界へと足を踏み込んでいったのだ。

カービィ「ううわっ……。鏡だらけだな……。」

デデデ「まさにこれこそ「鏡の国」だな……。しかも反射してばつかでまぶしい……。」

パラワド「そんなこと言わずにさっさと行くツスよ!!」

カービィ「よし……。原因究明開始だあ!!」

パラワド「オオーツス!!」

カービィ達はさっそくワープスターをおいて、領内を歩き回りだした。

しかし、どこまで歩いても鏡、鏡、鏡……。

カービィ「はぁ……。疲れたなぁ……。」

デデデ「しかも鎧が重いからさらに体力が奪われる……。」

パラワド「ああ、ワープスターに乗ればよかったツスね……。」

カービィ達は長時間歩いているかつまったく同じ風景がずらりスラリと並んでいるため、カービィ達は疲れてきたのだ。
そんなときに、目の前に街並みが見えてきた。

パラワード「んおお……。！？大王様！！目の前に、町が！」

デデデ「ああん……。？……。！？ほ、ホントだ！！町Z O Y！！」
カービィ「わお！！ラッキーだ！！よし、あそこでちょっと休んで調査するぞ！！」

デデデ「OK！！」

カービィ達は早速猛ダッシュである町まで急ぐ。

・・・

しばらくしてカービィ達はたどり着いた。

カービィ「……。とりあえず……。たどり着いたな……。」

デデデ「相変わらずここもピカピカしてんなあ……。」

パラワード「はあ……。鏡ばっかで飽きちゃったツス……。」

カービィ達が訪れた街は普通の変哲もない町並みで、鏡でできていること以外は特になにも現実世界と変わりはない建物ばかりがずらりと並んである。

カービィ達は鏡以外特に変わりのない町並みにすぐに慣れた。

カービィ「とりあえず町の誰かに聞いてみよう。」

パラワード「そうしようツス！！」

そっつい、町の誰かに聞こうとすると、突然前から誰かが走ってきた。

その誰かはカービィにしがみつき、思いっきりカービィを揺さぶる。

???「た、助けてくれ……！！」

カービィ「お、おまえは、シャドー……。！！」

そう、カービイにしがみついたのはあのカービイの鏡である「シャドーカービイ」であつた！！

デデデ「おお？ああ、おまえはこの前の・・・！！」

シャドーカービイ「わが鏡！！お願いだ！！助けてくれ！！」
カービイ「い、いったい何の話だよ！！」

シャドーカービイ「王様がくるってしまった・・・！！」
カービイ「お、王様・・・？」

とつぜん空から降ってきた謎のかけら。

その謎を解くために鏡の国へと向かったカービイ達！！

その先に待っていたのは、なんとあのシャドーカービイだつた！！
はたして、いったい何があつたのだろうか・・・！？

4 部作ⅠⅠに続く！！

4 部作ⅠⅠ 「再臨：片翼の天使」

???「た、助けてくれ・・・!!」

カービィ「お、おまえは、シャドー・・・!!」

カービィにしがみついたのはあのカービィの鏡である「シャドーカービィ」だった。

デデデ「おお？ああ、おまえはこの前の・・・!!」

シャドーカービィ「わが鏡!!お願いだ!!助けてくれ!!」

カービィ「い、いつたい何の話だよ!!」

シャドーカービィ「王様がくるってしまった・・・!!」

カービィ「お、王様・・・？」

カービィは何の話が分からず、首をかしげる。

シャドーカービィ「俺はさっきまであのミラーズキャッスルにいた・・・。」

シャドーカービィはそう言いながら遠くにある高くででかい鏡の建物に指をさす。

そう——「ミラーズキャッスル」である!!

カービィ達はシャドーカービィの指の方向を見つめた。

カービィ「ミラーズ・・・キャッスル・・・。」

デデデ「とするとここは城下町ってことだな・・・。」

パラウド「んで、その王がどうかしたんスか？」

シャドーカービィ「あのなかにさっきまで「ライトマインド王」がいたんだ!!でも、さっき王の間に入ったらなんか頭抱えて暴れて

て、拳句の果て暗黒化して天井のガラスを突き破って逃げて・・・
うう・・・。もうなにがなんだか・・・。」

シャドーカービィはそのままカービィの足元でうずくまった。

カービィはシャドーカービィの話を聞いてはいたが、内容は何も理解はしていなかった。

カービィ「ライトマインド・・・ねえ・・・。そいつは一体どこに行っただんだ・・・？」

シャドーカービィ「それが全く分からない・・・。でも、狂ったということは、この国に何かが起きているしるしだ・・・。王の意思」鏡の意思」国の意思だからなあ・・・。」

カービィ「そんなこんなあるだろうけど・・・結局何が言いたいんだっ！！」

シャドーカービィ「いや、だからあ・・・。」

そう言いかけた次の瞬間、空にヒビが入り始めた・・・！！

ピキ・・・ピキピキピキ・・・！！

シャドーカービィ「え・・・！！？」

カービィ「そ、空が・・・！！」

デデデ「いったい空が割れるなんて何度目なんだよ！！」

パラワド「１年くらい前にもこんなことがあったようななかったような・・・。」

そんな思いで空を見つめていたその時、視界に黒い玉が入った！！
その黒い玉はカービィの目の前を通り過ぎ、次々と破壊活動を行っていく。

チュガァーンッ！！

バァーンバァーンッ！！

カービィ「な、なんだなんだ！？」

カービィが振り向いたその先には、かなり見覚えのあるあいつがいた。

ワドルディダークネス精神体「ひゃっほい！！破壊って楽しいッスねえ！！」

カービィ「あ、あいつはワドルディダークネスなんじゃ・・・！？」

カービィ達が目にしたのは、ワドルディダークネスがうろつきまわって破壊活動を行っている姿だった！！

しかし、今回の場合、精神体なので足はない。

カービィ達はすぐに行動に移る。

シャドーカービィ（王様が狂ったのは、これが原因か？）

カービィ（王つてのが狂ったその日に現れるなんて、なんか不自然・・・。つてか、あの時死んだんじゃないのかよ・・・。）

1年前にゼロとの最終決戦でダークマターとともに倒したはずなのだが、実際に目の前にあいつがいる・・・。

そんな思いを頭から消し去り、ワドルディダークネスを追う。

カービィ「待て、ワドルディダークネス！！」

シャドーカービィ「あいつを見失ったら・・・手がかりがなくなってしまう・・・！！」

カービィ達はなおもあいつを追いかける。

さまざまな建物を通り過ぎ、どんどん追いかける。

そして、追いかけていくとある広場にたどり着いた。
「クリスタル広場」である。

ワドルディダークネス「やっとなつたツスウーッ!!」

ワドルディダークネスはそのクリスタル広場の中央にある石碑にもたれかかる。

それを見たシャドーカービィは奇声を上げる。

シャドーカービィ「ああーっ!!」

カービィ「わわっ!?!ど、どうした!?!」

シャドーカービィ「あのクリスタルの石碑を壊されたら・・・鏡の国が・・・半壊する・・・!!」

カービィ「え、半壊って・・・!?!さつさとめないと!!」

カービィ達は急いでワドルディダークネスを止めようとした。
だが、もう遅かった。

ワドルディダークネスはあの石碑の真横で攻撃の構えに出る。

ワドルディダークネス「よおし!!そろそろ壊しちゃうツスよ!!」
カービィ「やめろおおーっ!!」

ワドルディダークネス「んお?カービィ・・・?ま、いいやあ♪」
暗黒超越弾・改「!!!」

ピッキヤアアアンツ!!!

ワドルディダークネスの体が光りだし、全身からとてつもなくまぶしい紫の光が広がる。

この光が放射能であることは誰も知らない・・・。

カービィはこの光の中に包まれ、そして国は半壊寸前となる。

空はひびが入って完全に割れ始め、大地は揺れ、どんどん崩壊して

いく。

バリーン

バリリーン！！

カービィ「ああああーっ！！！」

そして、ついに国は半壊した。してしまった。

鏡の破片はあちこちで浮かんでおり、そのひどさが目に見える。

彼らも鏡の破片とともに浮かんでいた。黒くて赤い、おぞましい空間に・・・。

デデデ「ぐぐ・・・。」

カービィ「・・・。」

その場にいた住民全員が浮かんでおり、あたりは最悪の状況。あまりにもひどすぎる状況だ・・・。

そんな中、最初に気がついたのはシャドーカービィだった。

シャドーカービィはゆっくりとまぶたを開く・・・。

シャドーカービィ「うう・・・うつん・・・？・・・ああ・・・？」

シャドーカービィは今の状況が理解できず、周辺を何度も見まわし、唖然とする。

シャドーカービィ「こ・・・ここはなんだ・・・。」

シャドーカービィはとりあえずカービィ達を起こし、しばらくしてから事情を説明する。

しかし、何度説明しても全く理解できない様子。もちろん説明して

いるシャドーカービイ本人もあまり理解できていない。
しばらくしても、カービイ達の顔はどうもぱっとしないようだ。

カービイ「・・・意味がわからない・・・。」

シャドーカービイ「だから僕だつてわからないよ。だが、あいつが
ぶち壊した後つてのは確かだよ・・・。」

パラウド「いったいどうするんスカ!？」

デデデ「そうだよ!!どうすりゃいいZOY!!」

彼らは突然のことに理解できずに戸惑っていた。

そんなときにシャドーカービイはあるものを見つけた。

シャドーカービイ「・・・ん・・・?・・・!!おい、あれを見る

!!」

デデデ「ああ?」

シャドーカービイが指をさした先には、まだ壊れていない国の半分
の空間が浮かんでいる姿であつた!!

カービイ達はそれを見て、希望あふれるさわやかな顔になる。

カービイ「おお、僕らの唯一の希望が・・・!!」

デデデ「おい、早く行くぞ!!」

パラウド「ちよつと待つてくれツスよ!!まだ後ろで浮かんでいる
人たちはどうするんスカ!？」

デデデ「関係ねえだろうが!!俺様たちのほうが大事だ!!行くぞ
!!」

パラウド「・・・所詮自分のことしか考えないんスカね・・・。現
実って悲惨ツスよ・・・。はあ・・・。」

パラウドは目に涙を浮かべながらカービイ達についていった。

どんどん横に遠ざかっていく鏡の国の半分を追うカービィ達。
カービィ達のほうが圧倒的に速いのであつという間にたどり着いた。
カービィ達はとりあえず地面をつかんで力いっぱい地面の上へと登る。

カービィ「うつ・・・ああんっ!!」
デデデ「よっこらせつと・・・。」

カービィ達4人はなんとか鏡の国にたどり着いた。

カービィ「ふう・・・やつとたどり着いたよ・・・。」
シャドーカービィ「・・・なんか、頭の中が真っ白だ・・・。
いったい何がどうで・・・うつん・・・。」

カービィ達はそのまま呆然とし、町の風景をしばらく眺める。

カービィ「・・・ワドルディダークネス・・・どこいった
んだろうな・・・?」

シャドーカービィ「・・・ホントだなあ・・・あいつがいない・・・。
んま、そのうち見つかるだろ。」

パラワド「なんかいい加減ツスね・・・。」
デデデ「んじゃ、そろそろ探すかな。」

そう言って歩き出そうとしたその時、町の東にある「ミラーズキャ
ッスル」に異変が!!

ゴゴゴゴゴ・・・
シャドーカービィ「・・・ん・・・?」
カービィ「お、どうした?」
シャドーカービィ「なんか・・・ミラーズキャッスルが・・・。」

カービィ「え・・・？」

シャドーカービィが指をさした先には、暗雲に包まれるミラーズキヤッスルの姿であった。

カービィは「あ」の形の口のまま立ちすくむ。

カービィ「なあ・・・なんじゃありゃあ・・・。」

デデデ「また行かなくちゃ悪いのか？めんでえよ。」

パラウド「調査にしに来ただけなのにいつの間にかこんな大問題に発展しちゃったツスかね・・・。」

シャドーカービィ「とにかく行くぞ。もしかしたらあいつがいるかもしれないな。」

カービィ「・・・。足がいい加減疲れましたよ・・・。」

だるそうにしながらも彼らは行く・・・。鏡の国の未来のために・・・。

彼らは嵐のようにぞろぞろと移動する人々の流れに逆らいながらもミラーズキヤッスルへと向かう。

そして、なんだかんだあつてあつというまにその城を目の前にした。

ズンツ

カービィ「・・・まさに「闇そのもの」だな・・・。」

シャドーカービィ「・・・僕に対する侮辱か？」

カービィ「そういうつもりはないよ。君は体が闇に染まってしまった存在だけ・・・。」

シャドーカービィ「・・・はあ・・・。闇・・・ねえ・・・。」

カービィ「んじゃ・・・行きますか・・・！！！」

カービィ達はずいに重い重い鏡のドアを開く・・・！！

カービィ達はまず玄関に入つてすぐの大広間にはいる。

その場でしばらく歩く。

カービィ「ふうん……。結構広いんやなあ……。宮殿の中みたいだな。」

シャドーカービィ「感心してる場合じゃないよ。早くし……」

そう言いかけたその時、天井の鏡が一気に割れ散って天井からあいつがやってきた!!

バリリリーンッ!!!

シャドーカービィ「うああっ!!?」

カービィ「なんだ!?!?!おあっ!!あ、あいつは……!?!」

カービィ達が目の前にしたのは、あの「ワドルディークネス」だった!!

だが、ワドルディークネスにはなんか変――

ワドルディークネス「ひゃあッはっはっはッ!!僕様の降臨ッスよ!!うひょッ!!」

カービィ「あ、あいつホントにワドルディークネスか……!?!」
パラワド「ぼ、僕とおんなじ……?でもなんか違うッス……。」

カービィ達が目の前にしているのは、あの真黒なマントの真黒な姿のワドルディークネスではない。

彼らが目の前にしているのは、右腕が黒い羽になっており、左腕に「両端が三つ又のヤリ」を持っていたワドルディークネスであつた。

カービィ達は大いに疑問を感じていた。

シャドーカービィ「おまえは、誰なんだ!?!」

ワドルディダークネス「はあゝい？何の話ツスカあ？」

カービィ「その姿は・・・！？」

ワドルディダークネス「ああ、この姿？「片翼の天使」ってところ
ツスね。フフフ」

カービィ「おまえ、セ○イロスの姿をパクったな？」

ワドルディダークネス「おおっと、君たちがそんなことを言える立
場なんスカねえ？」

カービィ「は・・・？」

ワドルディダークネス「あんたさんも十分化けもんじゃないツスカ。
」

ワドルディダークネスはそのままおでこに手を当て、溜息をする。

ワドルディダークネス「はあ・・・。そうなっちゃしょうがない。

僕様の名を「セーファワドルディDN」と改めるツスよ。」

デデデ「なゝんかややこしい話になってきたもんだな・・・。」

カービィは「セーファワドルディDN」の姿に頭を抱える。

セーファワドルディDN「んじゃ、ゲーム始めるツスカねえ？」

シャドーカービィ「この空気だと、そうなっちゃうれしいな。」

カービィ「久し振りだからぞくぞくするよ。」

ついに戦いが始まった！！

カービィ「行つくぜえゝ！！」

ウォーターカービィ「ウォーターカービィ！！」

セーファワドルディDN「うほ、久々のコピー能力ツスカ？」

シャドーカービィ「俺も忘れられちゃ困るぜ！！」

スパークカッターシャドーカービィ「スパークカッターシャドーカ

ービー！！」

セーファワドルディDN（名前ちょく長いツスよ・・・。）

セーファワドルディDNはそのような思いを抱きながらヤリを構える。

その直後にカービーが攻撃に出る！！

ウォーターカービー「うおおし！！」「津波」！！」

セーファワドルディDN「ええ？おおつとお！！」

バツシャアアアーンツ！！！！

カービーは大量の水を渦巻き、「津波」を引き起こした！！

セーファワドルディDN「でも、僕に羽があることを忘れるなツスよ！！」

バサアツ

セーファワドルディDNは片翼を羽ばたかせた。

ウォーターカービーがやった津波は命中せず、辺りは海と化した。

ウォーターカービー「くっそっ！！」

スパークカッターシャドーカービー「次は俺だ！！」「ライジン斬」

！！」

スパークカッターシャドーカービーは海と化したミラーズキャッスルの床から飛び立ち、その先にいるセーファワドルディDNを迎え撃つ。

スパークカッターシャドーカービー「でやああーっ！！」

セーファワドルディDN「やるだけ無駄ツスよ。はあ。暗黒超越弾・

改！！」

バアンツ！！

スパークカッターシャドーカービィ「グワアアアーツ！！」

スパークカッターシャドーカービィはセーファワドルディDNの攻撃によって吹き飛ばされ、そのまま地面にたたきつけられる。

その衝撃で床の鏡が勢い良く割れ、周りにたくさん散乱する。同時に高い高い波が吹き上げた。

バツシャアアーン！！

バリリイイーンツ！！

その周りにいたデデデやパラウド、カービィの体に鏡が刺さる。

ズシャズシャズシャアーツ！！

デデデ&ワドルディ「あああーっ！！」

ウォーターカービィ「ぐぐ・・・！！」

セーファワドルディDN「きやはははは！！こんな光景が見られるなんて僕って恵まれてるツスね」

シャドーカービィ「いらつくな、おまえってやつは・・・！！」

セーファワドルディDN「もっと味わさせてくれツスよ、苦しみの光景を見るこの喜びを・・・！！」

4 部作IIIIに続く！！

4部作ⅠⅠⅠ 「無がすべてを制す・・・」

バツシャアアーン！！
バリリイーンッ！！

その周りにいたデデデやパラウド、カービィの体に鏡が刺さる。

ズシャズシャズシャアーツ！！

デデデ&パラウド「あああーっ！！」

ウォーターカービィ「ぐぐ・・・！！」

3人はそのまま気絶する。

セーファワドルディDN「きゃはははは！！こんな光景が見られるなんて僕って恵まれてるツスね」

シャドーカービィ「いらつくな、おまえってやつは・・・！！」

セーファワドルディDN「もっと味わさせてくれツスよ、苦しみの光景を見る喜びを・・・！！」

シャドーカービィ「その言葉も相当イラつくな・・・！！」

そう言っているこのとき、セーファワドルディDNは三つ又の槍を構えていた。

セーファワドルディDN「お願いだから、僕を楽しませてくれツスよ・・・！！ふああっ！！」

セーファワドルディDNは三つ又の槍を真下に構え、シャドーカービィにめがけて垂直落下した！！

ゴオオオーッ

シャドーカービィ「よおやるわ。ほあぁっ!!」

シャドーカービィは真上に手を構えた。

その手に水色のオーラが集結し、「アイスソード」を呼び寄せた。

アイスソードシャドーカービィは真上から垂直落下してくるセーフ
アワドルディDNを直前で払いのけた。

その勢いでセーフアワドルディDNは横に吹き飛ばされる。

セーフアワドルディDN「腕は確かなようツスね。でも、あんたは
だめだ!!」

そういうと、セーフアワドルディDNは三つ又の槍を水平に構えた。
その時、三つ又の槍が伸びたのだ!! ゴムのように、平行に伸びた
!!

その様子にアイスソードシャドーカービィは仰天した。

アイスソードシャドーカービィ「あ・・・え・・・!!? うおおっ!
!!」

カンキンカンキン!!

その伸びを利用して連続に突き続ける。

そのあまりに速さに防御態勢はあっという間に崩れ、アイスソード
が吹っ飛ぶ。

ガアーンッ

シャドーカービィ「どわぁっ!?!」

セーフアワドルディDN「ス・キ・ア・リ」ほっ!!」

セーフアワドルディDNはシャドーカービィの体の至る所をどんど

んやりで伸ばしてグサグサ刺していく。

グサグサグサグサグサ！！

シャドーカービィ「グガガガガ、ドアアーツ！！」

セーファワドルディDN「もう、きみは終わりだね。外道の道を歩みすぎた君の人生に終止符を打ってやるッスよ。」

そういった瞬間、セーファワドルディDNは三つ又の槍を「ライジングモード」に切り替えた。

ガチャ

セーファワドルディDN「ふふ・・・！！」「ライジングホームラン」
「！！」

カッキイーンツ

シャドーカービィ「ぐうわああーっ！！」

ガツシャアアーンツ！！

シャドーカービィはバットに打たれたかのように勢いよく吹き飛び、そのままガラスをつき割って外へと飛び出した！！

シャドーカービィ「オワアーツ！！」

バシャアアーンツ

シャドーカービィはそのまま城の堀の中に沈んだ。

シャドーカービィ「王・・・様・・・。」

シャドーカービィは堀の奥の奥までと沈んでいった。
その様子をセーファワドルディDNは一部始終みていた。

セーファワドルディDN「・・・ふう。終焉したッすね・・・。ぷはははは！！あっさりだっただよー！！」

「???「何があっさりだっただよー」」

セーファワドルディDN「ほお。気づいてたんスね。」

後ろであいつがハンマーを構えていた。

セーファワドルディDN「・・・カービィ。」

ニューハンマーカービィ「シャドーに何しやがったんだー！！」

セーファワドルディDN「眠らせてあげただけさ。死なせちゃいないッスよ。」

ニューハンマーカービィ「・・・なぜ僕らの邪魔をする？」

セーファワドルディDN「いずれわかるッスよ・・・ふっ！！」

セーファワドルディDNは突然三つ又の槍を振り上げ、カービィを吹き飛ばそうとした。

が、カービィは瞬時に対応して後ろに下がる。

ズザアッ

ニューハンマーカービィ「何やったって一緒だよ。さっさとはいけ！！」

セーファワドルディDN「あんたは何にもわかつちやいないッスよ！！」

そういうとセーファワドルディDNは近くにあった螺旋状らせんじょうの階段を上りだした。

カービィもそれを追いかけて階段を昇る。

ニューハンマーカービィ「くっ、まて！！」
タッタッタッタ

セーファワドルディDN「なぜ僕を追いかけるんスか？はあっ！！」

セーファワドルディDNはあの槍で伸ばしてカービィに突くが、カービィが持っていたデデデの「ニューハンマー」で下向きに打ち付けた！！

ドッキヤアアーンッ！！

セーファワドルディDN「ほお、そのハンマー、少しはやるんスね。」

ニューハンマーカービィ「黙ってくれ。バーニングモード！！」

セーファワドルディDN「僕はライジングモードで。」

セファワド&カービィ「ほああっ！！」

ガッキイイーンッ！！

炎と雷、この2つの力がぶつかり合い、衝撃波を生んだ。

お互いにその力でぶつけ合う。

「ハンマー」と「やり」の2つの勢力がぶつかり合いながら螺旋状の階段をどんどん昇る。

ガン、キン、ゴン、キン！！

ニューハンマーカービィ「ぐぐ・・・！！」

セーファワドルディDN「きつくなつたッスか？ならば面倒なことをさっぱりと！！」

そついうとセーファワドルディDNはニューハンマーカービィのハンマーを勢いよく横の払いのけ、そのままカービィの腹を槍で貫通させた！！

ズッサアーンッ！！

ニューハンマーカービィ「ああ・・・？」

セーファワドルディDN「あの時の痛み、思い出してくれたッスか？」

ニューハンマーカービィ「ぐ・・・ぐあ・・・!!」

セーファワドルディDN「いま再び忘れられぬ痛みを刻み込んでやるッスよ・・・!!ふりゃ!!」

ブウンッ

そのままセーファワドルディDNは上に振り上げてカービィを空中に飛ばした。

セーファワドルディDNもあの黒い翼をはたかせて空へと飛び、空中にいるカービィを迎え撃つ。

セーファワドルディDN「君にいい物を贈るッスよ。」

ズザズシャ、ズドドド!!

ニューハンマーカービィ「ぐあ、どお、ああっ!!」

セーファワドルディDNは右へ左へと瞬間移動しながら槍でカービィを突き、刺しまくる。

カービィの全身に大量の血が吹き出し、セーファワドルディDNはその返り血を浴びるが気にしない様子。

そして、ついに真上から槍で突き落とした!!

セーファワドルディDN「君への贈り物は・・・「絶望」だあっ!

!!」

ずしゃああーっ!!!!

ニューハンマーカービィ「ぐわああーっ!!!!」

カービィはそのまま叩き落され、螺旋状の階段をどんどん突き破って真下へと落下していく。

バリバリバリバーンッ
ニューハンマーカービィ「ぐがが、ぐおおっ!!」
バアアーンッ

カービィは一階の床に落下し、ものすごい勢いで鏡のかけらが飛び散る。

下の仲間2人もその衝撃でようやく気付く。

デデデ「う・・・う・・・うん?・・・うおっ!?!な、え、カービィ?
ちょ、おい、何があつたんだ!!おい!!ってかワドルディも大丈夫か!?!」

ユサユサッ

パラウド「ううん・・・んあ?うお?おっ!?!大王様!?!
・・・ってああ!!カービィ!!」

2人はそのままカービィを起こし、様子を見る。

カービィ「ぐ・・・」

デデデ「何があつたんだよおい!!ってかなんで俺様のハンマーちやっかり持ってたんだよ・・・」

カービィ「う・・・上を見る・・・」

デデデ「ああ?」

デデデは上を見上げた。

その先には、「片翼の天使」がいた・・・。

ゴゴゴゴ・・・

セーファワドルディDN「ふふ・・・♪楽しんでくれたツスか?」

パラウド「ふぎゃあ!!なんか言ってるツスよ!?!」

デデデ「いつもイラつく野郎だな。」

セーファワードルディDN「それじゃ、さっきよりもすばらしい絶望を贈ってやるツスよ！！僕にひざまずく姿をせひぜひ見せてくれツスよ！！ほあぁっ！！」

そういうと、セーファワードルディDNは突然天井を貫いた！！

バリーンッ

カービィ「おお・・・！？」

パラウド「わわっ！？な、なんなんスカ！？」

一瞬しんとした空気となる。

そしてその直後、なんと天井全体が屋根ごと落ちてきたのだ！！しかもその素材は「鏡」！！地面に激突すれば一撃だ・・・。これは大変だ！！

デデデ「ぎよわぁーっ！？ど、どうするんだよおい！！」

パラウド「全部終わりツスよぉ！！」

カービィ「く・・・。こうなれば・・・」

クラッシュソードカービィ「クラッシュソードカービィ！！」

カービィは「クラッシュ」の効果を持つ剣「クラッシュソードカービィ」となった！！

ちなみにこのソードは自分の体の4倍の大きさがあり、重さもカービィの10倍ととても重い。

だがカービィはこれを使い切るのだ。

そのコピー能力になった直後、さっそくあの屋根がすぐ真上に！！

パラウド「カービィ・・・！！」

クラッシュソードカービィ「ああ、任せとけ。ふっ！！」

カービィはどんどん落ちてくる屋根のがれきをどんどん叩き割っていった。

小さいものから大きいものまでたくさんのがれきが落ちてきたが、カービィは何とか全部切ることができた。

だが、最後のがれきを切り終わった直後にがれきの切り目からいきなりあいつが出現した！！

セーファワドルディDN「ふあぁっ！！」

クラッシュソードカービィ「な！？」

カーアンツ！！

カービィはとつさに剣を構えて防御に踏み切るがあっという間に跳ねのけられる。

クラッシュソードカービィ「うおっ！！」

セーファワドルディDN「君のお墓は「がれきの中」・・・ッスね？ほっ！！」

ドオォーンツ！！

クラッシュソードカービィ「ぬおあぁーっ！！！！」

バーアンツ！！

カービィはセーファワドルディDNの一突きで一気に屋根のがれきのたまり場まで吹き飛ばされ、一気に奥の奥まで埋もれてしまう。

クラッシュソードカービィ「ぐ・・・。」

セーファワドルディDN「君の運命はただ一つ。その運命を受け入れるべきッスよ、カービィさん。」

クラッシュソードカービィ「くっそ・・・！！あああぁーっ！！」

カービィは剣を片手に握りしめてがれきをどけながらもセーファワ

ドルディDNに立ち向かう。
だが、そのとき・・・

セーファワドルディDN「おっと、そろそろこの世界が滅ぶ時間。
残り2秒!!」
クラッシュソードカービー「は?」

宣言した「2秒後」というのは本当のことだった。
2秒後、鏡の国のすべてがガラスのように砕け散った・・・。

バババババライイーンツ!!!
デデデ「なあっ!?!」
パラワド「うおっ!?!」
クラッシュソードカービー「な、なんだこれは!?!ぬわああーっ
!!--!!」

カービーをはじめとした鏡の国にいるすべての生き物は滅びの世界
へと引きずり込まれていった・・・。

セーファワドルディDN「・・・無こそが・・・制す・・・!!--!!」

あの片翼の天使はそう呟き、どこかへと消えていった。
そのどこかとは——カービー達なら予測できるはずであろう・・・。
。

・・・う・・・うっ・・・
こ・・・ここは・・・ん・・・?
え・・・いったい・・・どこ・・・?

彼らが目覚めたのは、あの時から何十日も経ったときであった。
カービィのいた場所は、誰もいないさみしい空間であった。

カービィ「え．．．どこ、ここ．．．？」

カービィの見まわした世界は、この前「鏡の国の半分が崩壊したとき」のあの世界であった。赤くて黒い帯の漂うおぞましい世界．．．。

カービィは何が何だかわからなかった。

カービィ「おゝい、みんな．．．おゝい．．．おーい．．．おい．．．
．お．．．い．．．。」

叫んでも何も始まらない。始まるはずがない。

カービィはとりあえず平泳ぎ体勢で進むことにした。

カービィ「みんな．．．どこいったんだ？」

そう言いながら先へ先へと進むと、あるものがカービィの目に留まる。

カービィ「な、なんだあれは．．．！？」

カービィの目にとまったものとは．．．？

4 部作ⅠⅤ（最終回）に続く！！

4 部作Ⅴ 「歴史と遺産の継承者」

カービィ「みんな・・・どこいったんだ？」

そう言いながら先へ先へと進むと、あるものがカービィの目に留まる。

カービィ「な、なんだあれは・・・！？」

カービィの目にとまったものとは、まったく見覚えのない大きな奴が緑のクリスタルの中で固まっている姿だった・・・。

カービィ「こ、これは・・・！？」

???「くくく・・・ようこそ、滅びの世界へ・・・！！」

カービィ「・・・ワドルディ・・・ダークネスだな？」

緑のクリスタルの裏から現れたのは、なんとあのワドルディダークネスであつた！！

しかし、前のように黒い羽は生えていない。

カービィ「これは一体何なんだ・・・？」

ワドルディダークネス「ああ、これッスか？こいつはダークマインドッスよ？どうしたんスか？」

カービィ「ダークマインド・・・？・・・シャドーの言っていたあの王のことか？」

ワドルディダークネス「そうッスよ、そのとおりッスよ。くくくッ」

ワドルディダークネスはやけに顔がにやけている。
カービィはそれを疑問に思い、直球で言い放った。

カービィ「・・・なんで笑ってんだよ？」

ワドルディダークネス「ああ、僕？この王様の「善のパワー」を吸い取ってるんすよ。まだ本当の姿になりきってないんすからね。」

カービィ「・・・それで、何が始まるんだ？」

ワドルディダークネス「王の力をはじけさせるんすよ。鏡の力は絶大ツスが、善のパワーだから意味がないんすよ。」

カービィ「・・・それでなにをするつもりだ？」

ワドルディダークネス「悪のパワーにし、この空間、そして僕もろともすべて「無」にするんすよ。」

ワドルディダークネスは一連の計画をすべて明かした。

カービィはすべてが「無」になることを知り、動揺する。

カービィ「無にするって・・・な、え・・・。」

ワドルディダークネス「自分が永遠に消えるのが嫌なんすね？所詮、みな臆病ツスね。」

カービィ「・・・なぜ「無」に・・・？」

ワドルディダークネス「ありやりや？わかんないんすか？そりやゼロ様のためツスよ。」

カービィ「なぜゼロと関係がある・・・！？？」

ワドルディダークネス「無の力こそ「復活」につながるんすよ。無がすべて、すべてが無となる世界に、ゼロ様が再臨するんす。」

ワドルディダークネスは淡々と説明をする。

カービィは引き続き会話を続ける。

カービィ「・・・ゼロの精神はまだ消滅していなかったのか・・・！？？」

ワドルディダークネス「あのお方は永遠に消えることは・・・ない。」

「カービィ「ゼロ、再臨……。」

カービィは頭の中が真っ白になり、思考が完全停止する。

ワドルディダークネス「あの方が再びやってくる。「ゼロ殿完全復活」……くくく」

カービィ「ゼロを復活させるまねは……させんぞ……!!」

ワドルディダークネス「ならばこの計画を阻止することッスね」
うっ!!」

ワドルディダークネスは、柄から刃先まで3mもの長さを誇る名刀「闇宝刀」を取り出し、カービィに襲いかかる!!

カービィは死を覚悟して目をつむった。

とその瞬間、全空間360度すべてがパツと真っ白々になった!!

カービィ「え……!?!え、あ、うあえ?え、ここ、えええ……?
」

カービィがおどけているその瞬間、後ろから聞き覚えのある人物が語りかけた。

???「私なら、こんな絶望的な状況でも絶対にあきらめないな。」

カービィ「え、なっ、この声、え、とおちゃん……!?!」

カービィは後ろを向こうとするが、止められる。

ティンクルポポ6世「後ろを向いてらならん……。」

カービィ「とおちゃん……。」

ティンクルポポ6世「おまえはティンクルポポの名を受け継ぐつも

りだろ？ならがんばらなきゃな。その名を汚してはならん。」「8世」
として築き上げる。恥じぬようにな。」

カービィ「そ、そうだね……。ぐ……。」

カービィはゼエゼエと息を切らしながらもゆっくりと立ち上がる。

ティンクルポポ6世「2度も倒した相手なんですよ？楽勝じゃないか。」

カービィ「だ……。だね……。」

ティンクルポポ6世「ちゃんと……。受け継いでくれるよな？」

カービィ「もちろんさ……。ティンクルポポの名も……。とおち
やんの生きた証も……。僕が……。受け継いでいくよ……。」

ティンクルポポ6世「……。これで……。安心して逝ける……。！
！！」

カービィの父はそのままうつむき、静かに消えていった。

シュウンッ

カービィの目の前は再びあの戦場になる。

カービィは手を水平に伸ばし、黄色の光を走らせる。

シュウウウッ

マスターカービィ「とおちさんの遺産……。僕が受け継ぐ……。！
！」

カービィは目にもとまらぬ速さでワドルディークネスに向かう！！

ガーンッ

ワドルディークネス「ぬおおっ！？」

ワドルディダークネスは横に跳ね飛ばされる。

だがその先に緑のクリスタルがあったため、それを利用して斜め上へと飛び立つ。

カービィもそれを利用してワドルディダークネスを追う。

マスターカービィ「哀れだな、あんたはなんにもわかつちやいない！！絶対主君がすべてと思っているおまえに涙したよ・・・！！」
ワドルディダークネス「ふっ・・・。」

ワドルディダークネスはカービィ方面に体を向け、両者高速移動をしなが追う、逃げる。

そして、ついに運命のとき・・・！！

両者は刃にエネルギーをため、「光」と「闇」の相対する絶大な力が激しくぶつかった！！

チュツガアアーンツ！！！！

ゴゴゴゴゴ

ワドルディダークネス「ふっ・・・！！」

マスターカービィ「くっ・・・！！」

刀と剣、2つの勢力がぶつかり続く中でマスターソードに異変が・・・！！

ゴアアアーツ

ワドルディダークネス「な、なんスか！？」

パアーンツ！！

マスターカービィ「え・・・！？」

なんと、マスターソードが二つに割れて「ライティングマスターソ

ード」と「ダークネスマスターソード」の2つにわかれたのだ!!
そのうちの「ダークネスマスターソード」はワドルディダークネス
の横腹をバサツと斬った!!

ズシャアーツ!!

ワドルディダークネス「あ、ああああ・・・。」

そのまま「ダークネスマスターソード」は誰かの手に渡った。
その「誰か」とは・・・

ガシッ

???「ふふ・・・心配させたな・・・!!」

ライトニングマスターカービィ「シャ、シャドー・・・!!」

ダークネスマスターシャドーカービィ「話してる暇はねえ!!こいつを・・・!!」

ライトニングマスターカービィ「OK!!ライトニングバースト!!」
!!

ダークネスマスターシャドーカービィ「ダークネスバースト!!」
ボアアーツ

彼らの体に絶大な力を持つオーラを放ち、ワドルディダークネスを
迎え撃つ!!

カービィらはそれぞれ8の字の形で高速移動しながらどんどんワドル
ディダークネスを斬り裂いていく。

ズシャ、バサ、ズゴゴゴオーツ!!

ワドルディダークネス「ぐあ、ぬはっ、まっ、なっ!？」

ライトニングマスターカービィ「シャドー・・・!!」

ダークネスマスターシャドーカービィ「ああ・・・!!」

カービィ&シャドーカービィ「必殺・「ドリルエンド・ツヴァイ」

「！！」

2人はマスターソードを真上にあげてお互いの胸をくっつけ、真上に上げた手を結び、そのまま急降下してワドルディダークネスに突進する。

カービィ&シャドーカービィ「うおおおーっ！！」

ワドルディダークネス「な．．．！？ぶはあっ！！」

ズツシャアアーンツ！！！！

カービィ達はワドルディダークネスの心臓を勢い良く貫き倒した！！その直後にマスターソードは再び一つになる。

しゅううう．．．

マスターカービィ「やったな．．．」

シャドーカービィ「ああ．．．！！」

ワドルディダークネス「ぐ．．．ぶふう．．．！！」

マスターカービィ「な！？まだ生きていたのか．．．」

ワドルディダークネスは血まみれになった胸を押さえこみながらカービィ達をにらみつける。

マスターカービィ「お願いだ．．．。永遠に無のままでいてくれ．．

．．！！」

ワドルディダークネス「僕は．．．無になることはないツスよ．．．

。僕は僕の理想でゼロ殿を追いかけるツスよ．．．。でも、あなたたちの目の前には二度と顔を現わすことはないだろうツスね．．．。

「無に飲み込まれる運命」にすぎないツス．．．。」

そついうとワドルディダークネスは自分の胸を両腕で包み込み、静

かに無数の黒い羽根となって散っていった……。

シュウウウウ……

マスターカービィ「……本当にあらわれぬことを祈るか……？」
シャドーカービィ「そう願いたいな……。」

カービィはゆつくりとあの緑のクリスタルに目を向ける。

マスターカービィ「……あいつが散ってもあつちはまだ稼働中だ……どうすんだ？」

シャドーカービィ「王様が……クリスタル漬け……か……。」

シャドーカービィは思いつきり悩みこむ。

そして、ついにひとつの答えを導き出した……！！

シャドーカービィ「……封印してくれ……。」

マスターカービィ「え……！？」

シャドーカービィ「その剣で……封印してくれ……！！」

マスターカービィ「この剣でできるのか……！？」

シャドーカービィ「その剣がそう教えてくれた……。」

シャドーカービィはマスターソードを見つめる。

マスターカービィ「ダークマインドを封印したら……どうすんのよ、この国は？」

シャドーカービィ「国つつても形すらないしな……。」

マスターカービィ「……あんたが代わりにやる気なのか？」

シャドーカービィ「ゼロからのスタート……だ。」

マスターカービィ「……やっていいか……！？」

シャドーカービィ「ああ……。やって……。いいさ……。ぐ……。」

°
」

シャドーカービィ（王様・・・すまない・・・!!）
マスターカービィ「よし・・・。」

ボワアッ

カービィはマスターソードに最大限の力を集め、そしてそのまま
スターソードをダークマインドに向かって投げた!!

ビュウウーツ

バリント

ダークマインド「アア、オアアアア・・・!!!!」

シュウウウ・・・

ダークマインドは金切り声をあげながら次元のはざまに封印されて
いった・・・。

カービィ「・・・意外にあっさりやってしまったが、本当にこれで
よかったのか・・・!？」

シャドーカービィ「もう・・・元の王様には戻れないだろうし・・・
これで・・・よかったんだ・・・。」

シャドーカービィは小声でチマチマと話す。

その途中に、カービィが上を見上げる。

カービィ「・・・これから僕らどうすんだ?どうやって帰るんだろ
?」

シャドーカービィ「それならおれが導き出してやるよ。」

カービィ「え?」

そういうとシャドーカービィは両腕を真上に上げ、空間に穴を作った！！

ボワンツ

カービィ「おおっ！？あ、そういえば9か月前にも次元の穴をあけて帰ったんだっけ・・・？」

シャドーカービィ「忘れられちゃ困るぜ？んじゃ、この穴からあんなさんの世界にかえれよ。」

カービィ「あ、ああ。」

カービィは次元の穴の前に立つが、ふとこんなことを思った。

カービィ「あらあ・・・？なんか忘れてるような・・・？」

シャドーカービィ「あ？何を忘れてるかっち？知らねえよ。」

カービィ「でもなんか忘れてるんちなあ・・・。ま、いつか。」

デデデ「よくねえよおおーっ！！」

パラワド「そうツスよ！！」

真横から全力疾走でデデデとパラワドが飛んできた！！

カービィ「うおお！？あ、こいつらを忘れてたんだ、僕。」

デデデ「こいつら」ってなんだよ、「こいつら」って。」

パラワド「とにかくよかつたじゃないツスか、倒せて。」

カービィ「なんで知ってたんだよ。見てないでしょ？」

パラワド「はいはい、そういうところは気にしないツスよ。」

またいつものカービィ達になる。

シャドーカービィはその様子を見てにんまりとする。

シャドーカービィ「・・・んじゃ、カービィ、フグ、ワド・・・。」

デデデ「いまなんつた？」

カービィ「わわわわわーっ！！なんにもいってないよぉ？」
デデデ「そうか・・・気のせいかな・・・。」

カービィがキレル寸前でストップさせた。危ない危ない。

シャドーカービィ「んじゃ、みんな、御達者でな。」

カービィ「そっちもがんばれよ、国の再建、んじゃ、また会おう！
！」

カービィ達はそのまま次元の穴に飛び込み、シャドーカービィに別
れを告げた。

ヒュンッ

シャドーカービィ「・・・また、会えるよな・・・？」

シャドーカービィは後ろを振り向き、国の再建を始めた。

あれから2日・・・。

カービィ達は城で雑談をしていた。

カービィ「実は今度「ディガンマ」っていう「自作ゲーム」を零物
質が作るんだってさ！！」

パラワード「零物質って、誰ツスか？」

カービィ「この小説の作者よ」。知らないの？」

カービィはある本を差し出す。

パラワード「ええっと、「星のカービィ ゼロの復讐劇」??ああ、
知ってるツスよ!!!ダブルミリオン突破したあの有名な本でしょ？」

カービィ「ああ、そうさ！！この本の作者が今度自分でゲームを作るんだってさ！！」

パラウド「へえ〜！！・・・んで何のゲーム？」

カービィ「RPGらしいよ。戦闘は横視点だとか。ちなみに「RPGツクールVX」つてので作るらしいぜ。」

パラウド「作者もよくやるツスよ。うんうん。」
カーンカーン

そう雑談していると昼の鐘が。

パラウド「あ、12時ツス。」

カービィ「そろそろランチルームに行くとするか。あ、ワドルディは先に行つてて。」

パラウド「あ、わかつたツス。」

パラウドは先に階段を下りて行つた・・・。

その間にカービィはゲームコントローラーや本などを片付けていた。その後全部片付けたので部屋を出ようとした。

その時、後ろでまたあの声が・・・。

???「もう・・・大丈夫だよな・・・？」

カービィ「え・・・！？」

カービィは後ろを振り向いたが、そこには誰もいなかった。

カービィ（・・・とおちゃん、大丈夫だよ。僕が責任もって継承していくよ・・・。）

カービィはそう心の中でつぶやき、再び前を向いて階段をゆっくりと降りていく・・・。

父「6世」はそんな「8世」の姿を見て安心し、静かにどこかへと消えていった・・・。

この9ヶ月後、再びあの出来事に出くわすとは彼らは思いもしないだろう・・・。

???「この羽根のおかげで、思念体になれたんだ・・・!!」

星のカービィ ゼロの復讐劇ⅠⅠⅠ - 大迷宮 -
完!!

4 部作ⅠⅤ 「歴史と遺産の継承者」(後書き)

4 部作全部読んでくれてありがとうございます!!

皆さんからよく「このシリーズはいつまで続くんですか?」と聞きます。

答えまゝです。たぶんⅤⅠで終了させちゃいます。はい。

もう疑問は解消しましたね? 解消したならばそれでよし!!

さて、次回作の「ⅠⅤ」ですが、いつやるかというところ。。。

日時: 7 月 4 日頃から

間隔: 2 日に 1 回

話数: 25 ~ 28 話くらい

・・・ってなわけです。

では、引き続き僕の小説活動をよろしくお願いします。

宣告。新2作品同時発表。

???「・・・生物ってどうしてこんなに愚かなのかな?」

デデデ「全ての生物は「夢」ってやつに弱いんだZOY・・・。」

???「夢・・・ねえ・・・。」

デデデ「全生物は古きものを切り捨て、新しきものに切り替えようとする・・・。新しきものを望む「夢」は全生物の共通の望みであり、最大の弱点でもあるんだZOY。」

???「へえ・・・。もしかして「古きもの」は僕たちのことも言っているの・・・?」

デデデ「・・・。」

???「だいたいこんなことになったのはあんたたちのせいなんだよ。」

デデデ「・・・それがどうした。」

???「やつぱりあんたも苦手なんだね。」

デデデ「いやあ、そんなのじゃない・・・。俺様が望んでいるのは・・・平和のみだ・・・。」

2年前のあのゼロとの最終死闘を覚えてるだろうか・・・。

二度と彼らを犠牲にはしたくない――

彼らはその思いを胸に闇と向き合い続けた。

1年3か月前にはマルクと、1年前にはワドルディークネスと死闘を繰り広げ、何度も崖っぷちに追いやらねながらも何とか倒すことができた。

そしてパピプ歴1009年、カービィ達はこのかけがえない星「ポップスター」の運命をめぐる壮大な冒険に出ることになる。

カービィ「父ちゃんのことをすべて継承する・・・そのはずなのに、どうして僕は・・・。」

ティンクルポポ7世「兄さん・・・もう早いよな・・・もう2年たっちゃうんだよ・・・？」

カービィは父6世の墓の前でマスターソードを片手に持ち、7世はじつと父の名を見つめていた。

このわずか1時間後に壮大な冒険に出るとは思ひもなかっただろうに・・・。

その同じ時間に、デデデは最上階のとても広いベランダで謎の人物と会談をしていた。

???「彼が・・・来る・・・。」

デデデ「あいつか・・・悪夢だな。」

デデデは再び脳裏にあいつの姿が浮かぶ。

???「僕はただ母さんの首を探しに来ただけ・・・。」

デデデ「・・・よほどのマザコンなんだな・・・。」

???「そう言われてもしょうがないよ。あんたたちが歯車をおかしくしたんだから・・・。」

デデデ「・・・おれたちが何をやったというんだ・・・？」

???「あんたたちの先祖はかつて母を殺した・・・！！僕が殺すならあんたたちしかいないでしょ？」

デデデ「母だか仇だかしんねえが、俺様たちは何度驚異があるうが何度でも阻止して見せるZOY。」

???「黙れ！！あんたたちが何をやろうと結末は同じだ！！」

細胞が再結集したとき、再びあいつが降臨する――

???「われと星は一体となり、やがては新たな星や生命、そして

輝ける未来を創造する。」

カービィ「僕らや星はどうなるんだ!!」

??「愚かな行動を起こし得ないおまえたちになにができるというのだ・・・!!」

星の未来は、光が闇か――

その運命は、彼らの決戦にかけられた・・・!!

「星のカービィ ゼロの復讐劇Ⅴ -再結晶-」

7月初旬連載スタート!!

宣伝はこれだけでは終わらない・・・!!

初代「星のカービィゼロの復讐劇」が再び帰ってくる!!

「星のカービィ ゼロの復讐劇 Exceed」

全103話にも及ぶ長編小説「星のカービィゼロの復讐劇」が新たな形となって再び帰ってくる!!

「Exceed」と名付けたわけは「原作を超える再編集版」ということなのでこう名付けました。

この作品の特徴をまとめましょう。

まずは作品の再編集。

無駄なものは一切省き、誤字脱字の完全修正や会話・説明の追加・差し替えをします。

一見同じ作品のように見えても読んでみればちよつと違う作品に仕上がるようにしています。

そのため最終回にたどりつく頃には原作とちよつと違う印象を持つたまま終わるようになっております。

次に追加ストーリー。

今作は原作のストーリーに加えて、家庭内諸事情で残念ながら没となつてしまつた幻のストーリーを8話収録させる予定です。

原作で執り行つた「四天王決め」をしているゼロたちの様子を完全削除、その話々の内容を拡張させます。

そして番外編（付録）。

今作には何と番外編を付属させます！！

番外編の内容は、「カービィお出かけ中時のデデデとワドルディの日常」。

この番外編を2話にわたつて執筆、収録します。

こつやつて単純計算すると「全113話」となります。

が、まだまだあります！！

VS四天王戦やVS零式、VSゼロのストーリー内容を大幅追加・大拡張し、読者にもつとわかりやすくします！！

これで計算をすると「全117、8話くらい」になります。

このようにして初めて「Exceed」となるのです。

すべてはここから始まつた――

零物質先生の記念すべき「カービィ小説」第1作目が「完全」とな

って甦る・・・。

「星のカービィ ゼロの復讐劇 Exceed」

8月中旬（早ければ初旬）連載スタート！！

これからもどんどん読者と交流を深めていきたいなと考えてますんでよろしく願いしますね、はい。

では、2作ともよろしくです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8143g/>

星のカービィ ゼロの復讐劇III -大迷宮-

2010年10月13日13時53分発行